

本のある風景

公共図書館のこれから





ニューヨーク公共図書館、2023年8月11日
撮影: Michiyo Okabe

ご挨拶

岡部 三知代

ギャラリーエークワッド 館長

少し前のことになるが、米国の公共図書館のサービスに感銘したことがある。2017年に、UC Davisのサマースクールに参加していた18歳の息子は、週末ごとに夜行バスで遠方に出かけていたが、ある日とんでもないドジをやらかした。バスステーションにスマホを置き忘れた。戻った時にはすでに失く、周囲の人に携帯を借り、その位置情報をたよりに、闇雲に人に尋ねながらスマホを探して歩いた。そのうち、いつの間にか、道端にホームレスのテントが並ぶスラム街に入り込んでしまった。あきらめかけた時、集まってきた野次馬の中のメキシコ人の女性が、図書館ならインターネットが使えるからそこに行くのと良い、と地図を描いて渡してくれた。スラム街を抜けダウタウンにある図書館のインフォメーションセンターにたどり着くと、親切にも図書館員が、カウンターのパソコンでもう一度携帯の位置を調べ、図書館の電話番号が彼の携帯の画面に表示されるように操作してくれた。すると、30秒後くらいに彼の携帯を持つ人物から図書館に電話がかかった。この後が信じられないのだが、図書館員は、その人物がいる場所まで彼を車に乗せて同行し、彼のなけなしの40ドルと引き換えに携帯を取り戻すまで立ち会ってくれた。彼が感謝を伝えると「国や地域に関わらずどんな街にも親切な人はいて、そして自分は訪れた人々がこの街をよく思ってくれるよう貢献したいのだ」と答えたそうだ。なんと素晴らしい公共サービスであろう。このようなエピソードは彼だけに起こったことではあるまい。外国人であろうと、誰でも公共のサービスは開かれている。米国では、図書館は単に本を貸し出すだけの場所ではないのだ、との時知った。(ちなみにその図書館はロサンゼルス公立図書館である。)

近年、日本の公共図書館も、コミュニティを支える社会的基盤として、そのサービスの風景を変えつつある。市民の学習、レクリエーションの場を提供し、本との出会いの体験を通じて、市民が多角的な公共サービスと繋がる場となりつつある。

IFLAのPublic Library of the Year を受賞する海外の公共図書館の事例をみても、建築は、自然環境に開放的で空間的な心地良さを有し、読書、調査研究のための豊富な資料、仕事や生活から生じる様々な要求に対応した、使い勝手のいいサービス、さらにカフェ、レストラン、レクチャーホールやシアター、また多様なイベントプログラムが図書館のサービス範囲を広げている。それらの事例に日本の公共図書館も追随しているように見える。本展は、このような時流を見つめるとともに、民主主義の象徴として、誰もが無料で書物や資料に触れ、学ぶことが出来かつ地域創造の場として誕生した公共図書館の役割と広がるサービスの魅力を国内外の事例を通じて紹介するものである。

今後の都市、地域社会の成長はこれまでのように企業の誘致を推進するだけではなく、創造力や、先端的な技術をもつ人材によるクリエイティブ資本を有することが決め手になる。それらのクリエイティブな人々を引き寄せるためには、技術・ハイテク産業と才能の集積、また、自然環境と文化のファシリティを受け入れる寛容さが備わっていることが求められることであろう。

本展が、今後の社会基盤のコミュニティとしての図書館の可能性に触れ、本との出会いの場へつながる扉となれば幸いである。

Opening Remarks

Michiyo OKABE

Director, Gallery A⁴

Not long ago, in 2017, I was impressed by the service at one of the public libraries in the U.S. My 18-year-old son, who was attending summer school at UC Davis, would go on overnight bus trips every weekend, but on one of these trips, he inadvertently did something unimaginable for a young person today. He left his smartphone at a bus station, and it was not handed in there. He walked around blindly asking people for help, using others' mobile phone's location data as a guide. And before he knew it, he had entered a slum area with several tents for the homeless set up on the sidewalks. He was about to give up his search when one Mexican woman, who had gathered around him, handed him a map and told him that he could go to a library and use the internet there. Upon arriving at the information centre of the library downtown, a librarian kindly helped him locate his mobile phone again on their computer at the counter and operated it in such a way that the library's phone number would appear on his mobile phone screen. Within 30 seconds, the person in possession of his phone called the library. What followed was truly amazing: the librarian took my son in his car to the caller's location and stayed with my son until he had retrieved his phone. In order to get it back, he had to pay the person. My son paid \$40, which was all he had on him at the time. When he expressed his gratitude to the librarian, he replied, "There are kind people in every city, regardless of country or region, and I want to do my part to make visitors feel good about our city." What a wonderful public service! Such experiences are not unique to him, of course. Public services are available for everyone's use, regardless of nationality. I learnt then that in the U.S., libraries are more than just a place to check out books. (The library, by the way, was the Los Angeles Central Public Library.)

In recent years, there has also been a change in the array of services offered by Japan's public libraries, which are part of the social infrastructure that supports our communities. Our libraries here in Japan are becoming places where citizens can connect with diverse public services as an indirect experience of simply wishing to read books, but also providing a place of learning as well as a place of connecting with others through a variety of activities for the general public, such as meeting rooms, a cafe, student study space, remote work spaces, handcraft lesson spaces, etc.

Taking a look at the overseas public libraries receiving IFLA's Public Library of the Year award shows that architecture that is open to the natural environment and offers spatial comfort; a wealth of materials for reading, research, and study; user-friendly services to meet the various demands of daily life; and cafes, restaurants, lecture halls, theatres, and diverse event programs that expand on the range of services offered by libraries are common. In other words, to win such an award, libraries today must be more progressive in the services they offer their public. Japanese public libraries are beginning to follow this trend. This exhibition looks at these current trends and at the role of public libraries, which were born as symbols of democracy and as places of community creation. Such libraries are places which anyone can access and learn from books and other materials free of charge, and this exhibition wishes to introduce the appeal of these expanding services through examples from Japan as well as abroad.

The future growth of cities and communities will be determined not only by attracting companies, as has been done in the past, but also by retaining the creative power and creative capital of people with cutting-edge skills. To attract such creative people, local communities will need to have a concentration of technology, high-tech industries and talent, natural environmental and cultural facilities, as well as a tolerance for diversity. And one such example of a cultural facility is the role of such abovementioned modern libraries provide.

It is my hope that this exhibition will provide a glimpse into the potential of libraries as the social infrastructure that supports a community, and are not just gateways to encounters with books.

図書館を知る

日本の図書館には、どのような種類や機能、そして可能性があるのかをみてみましょう。また図書館をめぐる歴史を辿り、あらゆる人に開かれた公共図書館がどのようにできてきたのかを概観します。

図書館とは…

「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設」
(図書館法第2条より・1950公布)

「図書館は、基本的人権のひとつとして知る自由をもつ国民に、資料と施設を提供することをもっとも重要な任務とする」
「すべての国民は、いつでもその必要とする資料を入手し利用する権利を有する。この権利を社会的に保障することは、すなわち知る自由を保障することである。図書館は、まさにこのことに責任を負う機関である」

(図書館の自由に関する宣言より・1979改訂)

「公共図書館は、その利用者があらゆる種類の知識や情報をたやすく入手できるようにする、地域の情報センターである。それは知識社会の不可欠な構成要素であって、ユニバーサル・アクセスを実現し、すべての人に情報の意味のある利用を可能にするという責任を果たすため、

情報伝達の新しい手法を継続的に取り入れる。また、知識の生産と情報や文化の共有・交換に必要な、そして市民の関与を推進するための、公共スペースを提供する」

(IFLA-UNESCO公共図書館宣言・2022採択)

監修：植松貞夫(日本図書館協会理事長)
協力：豊田藤子(『開く図書館』著者)
主要参考資料
・日本図書館協会「図書館について」
https://www.jla.or.jp/library/tabid/69/Default.aspx
・独立行政法人国際交流基金関西国際センター編著
『図書館のしごと—よりよい利用をサポートするために(第2版)』読書工房、2021

図書館の種類

国立図書館 (national library)

全国の「図書館の図書館」。日本の国立国会図書館は、国会議員職務をサポートし、行政・司法の各部門と国民へサービスを行う。「納本制度」によって国内のすべての出版物を保管している。

公共図書館 (public library)

地域住民に図書館サービスを提供。自治体が設置する「公立図書館」と、法人等が設置する「私立図書館」を総称して「公共図書館」と呼ぶ。
例…県/市/町/村立図書館

大学図書館 (academic library)

大学の学生・教職員の学習・研究に必要な資料を収集、保存、提供する。

学校図書館 (school library / media center)

学校のカリキュラムの展開を支援し豊かにすることが目的。「学校図書館法」により全ての学校に設置が義務づけられている。

専門図書館 (special library)

各種の組織体の構成員を対象とし、その組織の目的の実現のために設置される図書館。
例…国立天文台三鷹図書室、大宅壮一文庫

その他の施設に設置される図書館

例…公民館図書室、病院の図書館、美術館の図書館、刑務所の図書館など。

公共図書館のはたらき

知と情報の拠点をつくる

コレクション

- コレクション(蔵書)を作る
- 整理する
- 次世代へ伝える

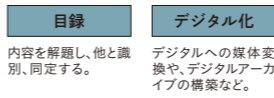


収集
図書、記録、視聴覚資料のほかに、郷土録資料、地方行政資料、録音資料、動画資料なども収集対象となる。館の所在地域や特色、利用者からの反応も反映しセレクトする。

整理
日本の多くの館はNDC(日本十進分類法)を採用している。さらに、関心を引く本が探しやすいよう独自の分類を加える館も。

保存
司書が行うほか、書籍修復の専門家とも連携。

修復
デジタルへの媒体変換や、デジタルアーカイブの構築など。



目録
内容を解題し、他と識別、同定する。

デジタル化
デジタルへの媒体変換や、デジタルアーカイブの構築など。

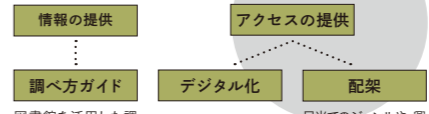
- #### 情報のネットワーク
- 全国の図書館ネットワーク(地域をまたいだ横断検索)
 - レファレンス・データベース(記録の蓄積と共有)
 - 国立国会図書館デジタル・コレクション(登録すれば誰でも利用可能)

図書館員がつくる、人のための情報拠点

様々な「知りたい」に応える

サービス

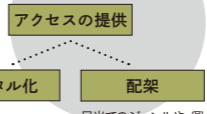
- 学びを支える
- 調べるサポート
- 暮らしに役立つ



情報の提供
図書館を活用した調べものに役立つ冊子などを発行。

調べ方ガイド
図書館を活用した調べものに役立つ冊子などを発行。

レファレンス
資料・情報の探索法や、入手した情報の評価法についてサポート。調べものや探求のサポートに加え、仕事や子育て、医療健康情報、法律などの課題解決にも対応範囲が広がっている。



アクセスの提供
目当てのジャンルや興味を引く本が見つかりやすいよう配置する。関心から本を探せるテーマ別の配架など、各館の工夫が光る。
>P14 石川県立図書館

デジタル化
デジタル化や配信により、遠隔でも資料にアクセスできる範囲が広がっている。

配信・配達
目当てのジャンルや興味を引く本が見つかりやすいよう配置する。関心から本を探せるテーマ別の配架など、各館の工夫が光る。
>P14 石川県立図書館



PC・WiFi設置
様々な情報にアクセスするための設備として、現代ではネット環境が必須となる。

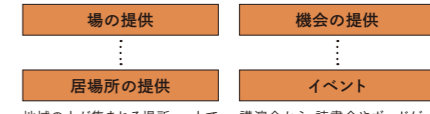
貸出
近年、自動貸出機やゲートを通るだけのワークスルー貸出を備えた館も登場。

- #### 土台となるネットワーク
- 全国的な図書館ネットワーク(地域をまたいだ横断検索)
 - レファレンス・データベース(記録の蓄積と共有)
 - 国立国会図書館デジタル・コレクション(登録すれば誰でも利用可能)
- 連携・協力**
近年、自動貸出機やゲートを通るだけのワークスルー貸出を備えた館も登場。

情報と人と地域をつなぐ

コミュニティ

- 出会いをつくる
- 地域の文化を伝える
- コミュニティの活性化



場の提供
居場所の提供

機会の提供
イベント

地域の人が集まれる場所、一人でも時間を過ごせる場所になる。青少年や高齢者など、社会から孤立しないための拠り所にもなりえる。
>P12 武蔵野プレイス

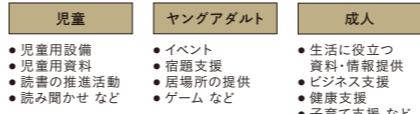
展示
書籍や貴重書、地域資料など、関心をよぶテーマや利用者参加などの工夫をした展示を企画。

- #### 地域のネットワーク
- > P16 海士町島まるごと図書館
 - 行政との連携
 - 地域内図書館施設との連携
 - MLA連携(ミュージアム、文書館等との連携)
 - 学校との連携
 - アウトリーチ(幼保、病院、福祉施設、刑務所等への移動図書館や団体貸出など)

図書館の可能性とそれを支える力

さまざまな対象に応じる

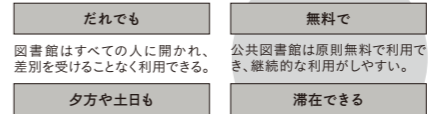
アクセシビリティ



- 児童**
 - 児童用設備
 - 児童用資料
 - 読書の推進活動
 - 読み聞かせ など
- ヤングアダルト**
 - イベント
 - 宿題支援
 - 居場所の提供
 - ゲーム など
- 成人**
 - 生活に役立つ資料・情報提供
 - ビジネス支援
 - 健康支援
 - 子育て支援 など
- 外国人**
 - 多言語資料・情報提供
 - 日本の生活に役立つ情報提供
 - 多文化理解のための展示・イベント など
- 障害者**
 - 点字図書、DAISY資料*他
 - 特性に応じた資料提供と設備
 - 配達
 - 朗読、筆談、手話通訳 など
 - *デジタル録音資料
- 高齢者**
 - 大活字本や拡大読書機
 - 健康に関する資料・情報提供
 - スマホ操作や相続等、生活に関わるワークショップ など

いつでも だれでも

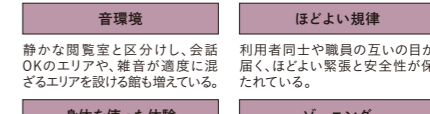
開かれていること



- だれでも**
図書館はすべての人に開かれ、差別を受けることなく利用できる。
- 無料で**
公共図書館は原則無料で利用できる。継続的な利用がしやすい。
- 夕方や土日**
公共施設の中では開館時間が長く、立ち寄りやすい。地域特性なども考慮し、夜間開館や時間外窓口などを設ける館も。
- 滞在できる**
長時間の利用ができ、家庭、学校、職場に次ぐサードプレイスとしても注目される。

図書館という場所がもたらす

空間の力



- 音環境**
静かな閲覧室と区分けし、会話OKのエリアや、雑音が過度に混ざるエリアを設ける館も増えている。
- ほどよい規律**
利用者同士や職員との互いの目が届く、ほどよい緊張と安全性が保たれている。
- 身体を使った体験**
WEB検索と異なり、館内を歩き回ること、資料との偶発的な出会いやひらめきにも繋がる。椅子、机、書架などの使い心地も印象を左右する。
- ゾーニング**
集中できる静かなエリアと、会話や飲食ができるエリアなど、用途に応じた空間の分節が工夫されている。
- 設備の充実**
会議室やネット環境等に加え、近年では3Dプリンタやキッチンなど、ものづくりのための設備を備える館も。
- 雰囲気**
本が並ぶ知的なイメージや、目に優しい照明など、場所がもつ雰囲気も利用者の印象に残る。

日本の図書館の歴史



帝国図書館
出典:本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—

明治時代

1902 私立の「大橋図書館」が麹町に開館。石川啄木なども利用した。

1906「帝国図書館」が開館。有料、閉架式で貸出はせず、館内閲覧のみに限られた。

1908「東京市立日比谷図書館」開館。新聞閲覧室や児童室、婦人閲覧室が設けられ、利用者の裾野を広げることが目指された。

明治時代半ばには、一般市民に向けた「通俗図書館」が各地域で開設された。あらゆる人が利用できる、近代の公共図書館のはじまりともいえる。

大正～戦前

天皇即位記念として各地に図書館が開館したことから、この頃、全国の図書館数は3300館を超えた。ただし半数は巡回文庫で、蔵書数も少なかった。学校校舎を借りて開く簡易図書館や、私立の図書館なども含まれる。

1923 関東大震災により、東京市中の多くの図書館が罹災し蔵書を失う。東京市立図書館のうち深川、駿河台、京橋の3館は鉄筋コンクリート造の大型館として再生。

1928 東京市立深川図書館 (1928・東京)

東京市立京橋図書館 (1929・東京)

東京市立駿河台図書館 (1930・東京)

民主クラシと図書館の増加

戦中～終戦

第二次世界大戦中、図書館の疎開やセメントの書庫で資料を守る館もあった。

1945 GHQによる教育制度改革の一貫として「CIE図書館」が日比谷に設置された。無料、開架式のアメリカの公共図書館サービスや経営方法が指導され、ストーリーアワー、講演会、映画会、英会話教室なども開催。1951年までに全国に23館のCIE図書館が開設された。

戦後

1948「国立国会図書館」が赤坂離宮（現迎賓館）を仮庁舎に開館。

1948 日本初の移動図書館として、高知県立図書館の「自動車文庫」がはじまる。続いて鹿児島や千葉でも、移動図書館が稼働。

1950「図書館法」公布。アメリカをモデルに図書館の設置や運営等について定め、全国に公共図書館が急速に増加し、今日の図書館制度の基盤が作られた。無料で開架式の図書館のはじまり。

1951 慶応義塾大学 図書館学学科が、米国の援助のもと日本初の大学における図書館員養成機関として設立。

1954 前川國男設計による「神奈川県立図書館」開館。フラットフロア、ノーステップの開架式図書館として、戦後の民主主義の振興を期待された。

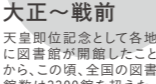
1954 前川國男設計による「神奈川県立図書館」開館。フラットフロア、ノーステップの開架式図書館として、戦後の民主主義の振興を期待された。



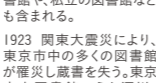
戦前の東京市立日比谷図書館
出典:本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—



赤坂離宮で再開した国立国会図書館
出典:本の玉手箱—国立国会図書館70年の歴史と蔵書—



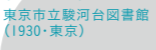
神奈川県立図書館



広島県立図書館による移動図書館船びまり号 (1962・広島)



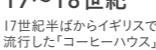
日野市立図書館による移動図書館びまり号 (1965・東京)



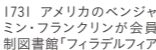
大分県立大分図書館 (1966・大分)



国立国会図書館本館 (1968・東京)



市町村立図書館が増加



1960年代



1970年代



1990年代



2000年代



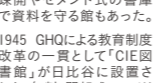
シカゴ公共図書館
出典:ウィキメディア コモンズ



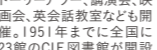
ハロルドワシントン図書館センター (1991・アメリカ)



バンクーバー公共図書館中央館 (1995・カナダ)



デンマーク王立図書館新館 ブラックダイヤモンド (1999・デンマーク)



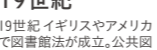
ドイツ国立図書館 フランクフルト館 (1996・ドイツ)



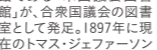
英国図書館 セント・パンクラス館 (1997・英国)



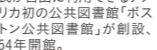
マルメウ市立図書館 (1997・スウェーデン)



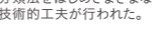
シアトル公立中央図書館
Photo: m, 2019
出典: Wikimedia Commons



オースロ公共図書館
Photo: Åshild Telle, 2020
出典: Wikimedia Commons



オースロ公共図書館
Photo: Åshild Telle, 2020
出典: Wikimedia Commons



オースロ公共図書館
Photo: Åshild Telle, 2020
出典: Wikimedia Commons



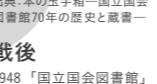
オースロ公共図書館
Photo: Åshild Telle, 2020
出典: Wikimedia Commons



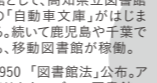
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



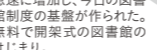
ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



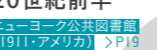
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



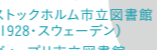
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



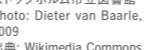
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



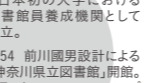
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



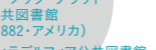
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



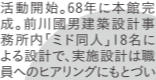
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



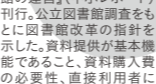
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



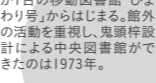
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



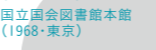
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



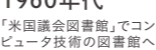
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



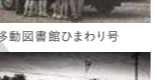
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



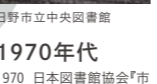
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



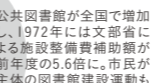
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



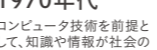
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



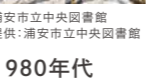
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



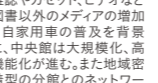
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



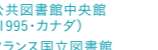
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



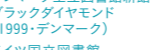
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



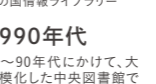
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



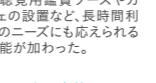
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



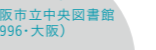
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



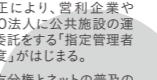
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



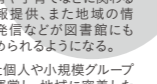
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



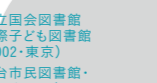
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



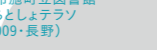
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



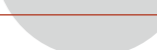
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



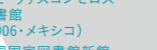
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



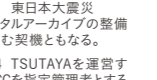
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



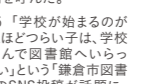
ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



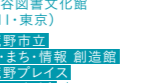
米国会議図書館 (1897・アメリカ) >P22



ポストン公共図書館
Photo: Boston Public Library, 1890~1895
出典: Wikimedia Commons



ストックホルム市立図書館
Photo: Dieter van Baarle, 2009
出典: Wikimedia Commons



建築家・鬼頭梓が戦後図書館に託したもの

松隈 洋

神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授

鬼頭梓(1926～2008年)という一人の建築家がいた。関東大震災直後の1926年1月15日、東京・吉祥寺に生まれた彼は、なぜ建築を志したのか。最晩年の次のような回想がある。

「小学校5年生のときに日中戦争が始まって、中学4年のときに日米開戦。戦争が終わったのは大学1年の時です。生活が破壊され、当り前の生活が大切なものだと感じていたんです。ごく当たり前の「生活の根拠地」、生活の拠点のようなものをちゃんと作りたいということ。そんな気持ちが僕を建築に向けました。」^{*1}

そんな建築学生だった鬼頭は、1947年、新宿の焦土に建ち上った木造の紀伊國屋書店に魅せられ、1950年、設計者の前川國男(1905～86年)の事務所に入所する。歴史の偶然は、彼に、戦前にはなかった開架式の閲覧室を持つ神奈川県立図書館・音楽堂(1954年)や、「真理がわれらを自由にするという確信に立って、憲法の誓約する日本の民主化と世界平和に寄与することを使命として、ここに設立される」と設置法の前文に謳われた国立国会図書館(1961年)を担当させる。また、後に国際基督教大学図書館長となる夫人の鬼頭當子は、1951年、進駐軍GHQの民主化政策で創設された慶應義塾大学図書館学科の第一期生であり、彼らの自宅には、民主主義の基盤となる図書館を求める若き司書たちが集っていた。

こうした人と人のつながりから、1964年の独立後、東京経済大学図書館(1968年)に続き、初代館長の前川恒雄(1930～2020年)とつくり上げたのが、日野市立中央図書館(1973年)である。そこには、市民生活に溶け込んだイギリスの地方図書館に学んだ前川の、図書館は「自立した個人が、自分の意志で、自分に必要な資料を自分で選ぶところ」であり、「資料や情報を市民に提供する」「システム全体」を指す、という明快な哲学があった。すでに前川は、バスを改造した移動図書館ひまわり号によって、市民の身近な場所に本を届ける実践を重ねていた^{*2}。また、鬼頭は、「図書館は皆のものであり、本の場所であり、そして私一人の場所でもある。そんな空間を創りたい」^{*3}と考えたのだ。こうして、1973年に竣工した日野市立図書館は、前川が同年に出版した共著の書名と同じく、戦後型の『図書館の発見』^{*4}だったのであり、その後の公共図書館の最良のモデルとなっていく。そして、鬼頭は、これを起点に、全国各地に20を超える公共図書館を手がけるのである。

それから半世紀が経った。敗戦後、さまざまな困難を乗り越えて彼らが実現させて、守り育てようとした戦後図書館は、市民の身近な存在になり得たのだろうか。1954年に日本図書館協会が議決した「図書館の自由に関する宣言」^{*5}は、守られているのか。この宣言に触発されて執筆され、映画化もされた有川浩の小説『図書館戦争』^{*6}に、日野図書館がシンボルの存在として登場するのも、そうした危機感が共有されているからだと思う。「私にとって、現代の図書館のもつ意味は、民主主義そのもののもつ意味とほとんど重なりあっていた」^{*7}と記す鬼頭の思いが込められた一連の図書館は、生き生きと使われているその姿によって、現代の私たちに、図書館の初心のありかを問い続けている。

Architect Azusa Kito’s Vision for Postwar Libraries

Hiroshi MATSUKUMA

Professor, Kanagawa University / Professor Emeritus, Kyoto Institute of Technology

There was an architect named Azusa Kito (1926-2008). Born in Kichijoji, Tokyo, on January 15, 1926, shortly after the Great Kanto Earthquake, what led him to pursue architecture? The following quote is a recollection from his final years.

“The war between Japan and China started when I was in the fifth grade of elementary school, and the war between Japan and the U.S. started when I was in the fourth year of middle school. I was in my first year of college when the war ended. Daily life had been destroyed, and I felt that normality was important. I wanted to create something that would be a base for living, a “groundwork” for ordinary daily life. It was this feeling that led me to architecture.” ^{*1}

As an architecture student, Kito was fascinated by the wooden Kinokuniya bookstore built on scorched earth in Shinjuku in 1947, and in 1950 he joined the office of architect Kunio Maekawa (1905-86). Historical coincidences put him in charge of the Kanagawa Prefectural Music Hall and Library (1954), which had an open-stack reading room – something that did not exist before the war – and the National Diet Library (1961), whose establishment law preamble states that it is “hereby established with the mission, based on the conviction that truth will set us free, to contribute to democratization of Japan and world peace, as pledged in the Constitution of Japan.” His wife, Masako Kito, who would later become the director of the International Christian University Library, was a graduate of the first Keio University Library Department, established in 1951 under the democratization policy of the Occupation Forces GHQ, and their home was a gathering place for young librarians who wanted libraries that would serve as a foundation for democracy.

Such personal connections led him to build the Tokyo Keizai University Library (1968) after he became independent in 1964, and this was followed by the Hino City Central Library (1973), which he built with Tsuneo Maekawa (1930-2020), the first director of the library. The library was a clear expression of Maekawa’s philosophy, informed by his study of British regional libraries that were integrated into people’s daily lives, that libraries are “places where independent individuals, of their own volition, choose the materials they need for themselves,” and that they are “entire systems” that “provide materials and information” to citizens. Maekawa had already been engaged in making books more accessible to citizens through the “Ido Toshokan Himawari-go” (Sunflower Bookmobile), a converted bus^{*2}. Kito also thought, “The library is a place for everyone, a place for books, and also a place for the lone individual,” and wanted to create such a space^{*3}. Thus, the Hino City Library, completed in 1973, was, like the title of the book Maekawa co-authored and published that same year, a postwar “Library Discovery”^{*4} and became the best model for public libraries that followed. Moreover, it was the starting point of Kito’s work on more than 20 public libraries throughout the country.

Half a century has passed since then. Have the libraries which they created, overcoming various difficulties after defeat in war, and which they tried to protect and nurture, become places that are accessible to citizens? Is the “Statement on Intellectual Freedom in Libraries”^{*5} passed by the Japan Library Association in 1954 being upheld? I think there is a shared sense of crisis about this, which is why the Hino Library appears as a symbolic presence in Hiro Arikawa’s “Library Wars,”^{*6} a novel that was inspired by this declaration and made into a movie. The series of libraries that embody the spirit of Kito, who once wrote, “For me, the meaning of the modern library is virtually synonymous with the meaning of democracy itself”^{*7}, continue to ask us to consider, through the vitality of their presence, what a library is and ought to be.



会場写真

註

- *1. 鬼頭梓＋鬼頭梓の本をつくる会編『建築家の自由 鬼頭梓と図書館建築』建築ジャーナル、2008年
- *2. 前川恒雄『移動図書館ひまわり号』筑摩書房1988年／夏葉社2016年復刊
- *3. 鬼頭梓「新しい図書館の建築」『現代詩手帖』1981年11月号
- *4. 石井敦・前川恒雄『図書館の発見―市民の新しい権利』NHKブックス、1973年
- *5. 東條文規『図書館の近代―私論・図書館はこうして大きくなった』ポット出版、1999年
- 西河内靖泰『知をひらく―「図書館の自由」を求めて』青灯社、2011年
- *6. 有川浩『図書館戦争』メディアワークス、2006年
- 「スペシャルインタビュー有川浩「自由宣言」は勇ましい!」『ず・ぼん』13号、ポット出版、2007年
- *7. 鬼頭梓『図書館建築雑感』『建築文化』1976年7月号

Notes

- *1. Azusa Kito + Association for the Creation of Books by Azusa Kito (eds.), “Architectural Freedom: Azusa Kito and Library Architecture,” Architectural Journal, 2008.
- *2. Tsuneo Maekawa, “Ido Toshokan Himawari-go,” Chikuma Shobo, 1988 / Reprinted by Natsuhasha, 2016.
- *3. Azusa Kito, “New Library Architecture,” Gendaishi Techo, November 1981.
- *4. Atsushi Ishii and Tsuneo Maekawa, “Library Discovery: A New Right for Citizens,” NHK Books, 1973.
- *5. Fuminori Tojo, “The Modern Age of Libraries – Personal Opinion: How Libraries Grew Up,” Pot Publishing, 1999.
- Yasuhiro Nishigouchi, “Making Knowledge Open: In Search of Library Freedom,” Seitosha, 2011.
- *6. Hiro Arikawa, “Library Wars,” Media Works, 2006.
- *7. “Special Interview with Hiro Arikawa: The ‘Statement on Freedom’ is Brave!” Zu-bon No. 13, Pot Publishing, 2007.
- *7. Azusa Kito, “Miscellaneous Thoughts on Library Architecture,” Architectural Culture, July 1976.



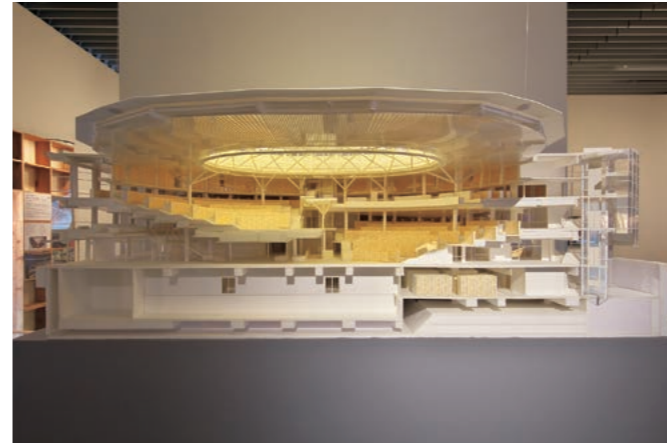
百冊百景の本が並ぶコーナー



国内図書館の紹介



会場風景



石川県立図書館 模型
提供：環境デザイン研究所



海外図書館の紹介

本のある風景 日本の図書館

高度に情報化が進む社会で、本のある場所はどんな意味を持つでしょうか。本と出会うための工夫、寄り道をしながら新しい世界にふれる空間体験、人の手をつなぐ地域との関係性など、近年の特色ある日本の公共図書館を紹介します。

武蔵野市立 ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス

街と人をつなぐ、本と出会いの広場

コレクション

来館者を出迎える、知への入口

書籍化される前の新しい情報提供に適した雑誌の所蔵に力を入れており、所蔵タイトル数は600を超える。またヤングアダルト(中高生を中心とした10代)向けの蔵書や、夜遅くまで開館しており会社帰りに立ち寄りビジネスパーソンが多いことから情報関連図書やビジネス書を充実させており、来館のきっかけにつなげている。

サービス

地域の情報・活動拠点として、朝から夜まで

図書館、青少年活動支援、生涯学習支援、市民活動支援の4つの機能を提供し、それらがまじりあうことで、知的な創造や交流を生み出し、地域社会の活性化が深められるような活動支援型の図書館となっている。開館時間は22時までで、公共図書館としては例が少ない。駅前に立地し、会社帰りや部活動の後にも立ち寄りやすく、利用者へ高い利便性を提供している。

コミュニティ

バンドもマルシェも、仕事も勉強も…市民の活動の場

武蔵野プレイスは知的活動と新しいコミュニケーションの創出を目指して市民活動を支援している。利用者は自分の意思で知的好奇心を満たしたり、ブラウジングゾーンで気軽に本や雑誌を見たり、カフェで寛ぐこともできる。本に接するだけでなく、音楽活動をしたり、ダンスや演劇をしたり、対話する場所も用意されている。図書館の中にとどまらず、目の前の公園では蔵書と関連したイベントや、定期的なマルシェが開催されるなど、多様なアクティビティが生まれている。本や活動を通じて人と人が出会い、知的な創造や交流によって新しいコミュニティを生み出すとともに、地域の活性化が図られている。

空間

ブラウジングとリーディングが心地よい空間

内部は知的活動にとって心地よい場となるよう、ひとまとまりで人のスケールに馴染む空間単位「ルーム」を縦横につなげて全体を構成している。各単位空間は壁と天井が曲面で連続し、適度な明るさと相まって、やわらかさと心地良さを醸し出している。用途に応じて椅子が選ばれ、手元作業のために照明が置かれているなど、居心地と利便性への配慮が感じられる。数か所に配された吹抜けを介して館内の活動が偶発的に目に留まり、また適度なざわめきとして伝わり、カジュアルな雰囲気や醸し出す一要因になっている。

アクセシビリティ

第三の居場所がコミュニティをはぐくむ

世代ごとの利用を想定してエリアを分け、縦にゾーニングしている。地下2階はヤングアダルトを対象にしたゾーンで、音楽やパフォーマンス、料理やモノづくりのスタジオがあり、館の特徴になっている。2階は子育て世代を意識した児童書・生活関連図書が並べられ、3階は市民活動エリアとして、個室とオープンスペースが配置されている。第三の居場所として思いのままに時間を過ごすことができる場が提供されていることは、利用者の親近感を醸成し、偶発的にコミュニティをつくりだす触媒として働いている。



1階カフェとマガジンラウンジ
本や雑誌はカフェに持ち込むこともでき、ゆったり過ごしながら、読書できる。



空間構成の単位
ルームと呼ぶ丸みを帯びたユニットを組み合わせ、各フロアは構成されている。

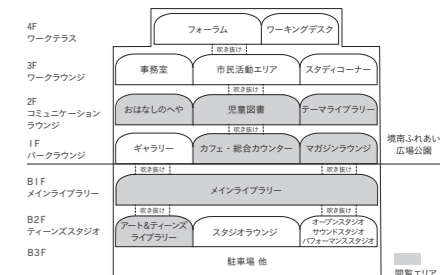


地下2階ティーンズスタジオ
自由に過ごせるラウンジ形式。ヤングアダルトの居場所となるように、多様な機能が用意されている。



3階ワークラウンジ
市内で活動する団体のチラシなどが貼られ、他の団体とつながるきっかけ作りの場になっている。

武蔵野駅南口の農水省食糧倉庫跡地の活用について、様々な検討の場で長く協議されていたが、1997年に武蔵野市議会に設置された特別委員会での議論を踏まえ、公園に隣接する「知的情報との出会いの場」として、武蔵野プレイスは誕生した。



所在地 東京都武蔵野市境南町2丁目3番18号
運営 (指定管理者)公益財団法人 武蔵野文化生涯学習事業団
開館 2011年7月
開館時間 9時30分～22時
設計者 kw+hg architects
敷地面積 2,166.20m²
延床面積 9,809.76m²
階数 地下3階地上4階(図書館以外の階を含む)
蔵書数 185,964冊(2021年度)
貸出件数 943,528件(2021年度)
駐車台数 30台(B3F:28台、1F:2台)
公式サイト <https://www.musashino.or.jp/place/>



原島正臣 館長の一言

武蔵野プレイスは本をツールに人が集まり、街を散策するようにブラウジングし、行政サービスと市民がつながる場所となっていることが特徴です。皆さん、プレイスの中に居場所を見つけながら、思い思いに過ごしていただいています。本や人との出会いを楽しんでいただけたら嬉しいです。

石川県立図書館

円形空間が無限の知の世界へいざなう

コレクション

目の前に広がる圧倒的な本の風景

蔵書総数110万冊。うち約7万冊が「グレートホール」と呼ばれる大閲覧空間に配架されている。円形劇場のような段状構成の木質系空間の中で、大切に紡ぎ出された本の集積は、本の杜を想起させる。県内外の生物文化多様性に関する本を集めた「里の恵み・文化の香り〜石川コレクション〜」や工芸品も本と同様に重要なコンテンツとして配架され、県立図書館としての特徴を際立たせている。4階にある周長約160mの「リング」には、1800年代のブリタニカ百科事典など、世界的に希少な書籍も配架されており、コレクションの奥行の深さと、誰もが手に取れる公共性があらわれている。

サービス

身近でなじみ深い12のテーマが本との距離を近づける

グレートホールの本棚には「暮らしを広げる」「世界に飛び出す」など、新たに創案した12のテーマで配架され、感覚的に親しみやすい。それ以外の書棚には研究調査など、目的性の高い利用者向けに、従来のNDC分類で配架されている。12のテーマごとの書棚には廣村正彰氏デザインによる視認性の高いサインが取り付けられており、ストレスなく本を探することができるだけでなく、テーマの言葉やサインが思わず本や雑誌を手にとってみたくなる気持ちを誘発する。

コミュニティ

知の広場としての役割を核にした、人・モノ・情報の交流空間

図書館は閲覧エリア、子どもエリアの他に文化交流エリアで構成されている。階段状の「だんだん広場」を核に、モノづくり体験や食文化体験ができるスペースがあり、人・モノ・情報が集まり交流を促すことが企図されている。行政や市民団体と協同したイベントも数多く開催されている。オーケストラ・アンサンブル金沢によるコンサートや、サッカーチーム・ツエーゲン金沢のパブリックビューイングなども開催。様々な出会い、過ごし方ができる機会や場が提供されている。

空間

木と本につつまれた円形劇場型の知の空間

設計者の環境デザイン研究所を率いる仙田満氏が半世紀をかけて発展させた遊環構造理論に基づき、歩き回りたくなるような循環性・回遊性を持つ空間が創出されている。閲覧エリアは円形劇場のような段状構成で、1階から3階までスロープで接続され、書棚と多様な閲覧席によって集中と探索の楽しみが同居する、魅力にあふれた空間となっている。「リング」や、吹抜け中央の3階に架かるブリッジから一望する閲覧空間は圧巻。館内に用意された様々な居場所を特徴づけているのが、色彩計画や川上元美氏監修による家具計画で、来館者の思いの滞在スタイルをサポートしている。

アクセシビリティ

ゾーニングと連動させた館内ルールから見えてきた新しい情景

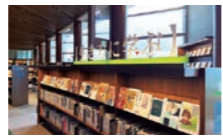
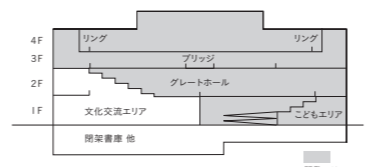
大声でなければ館内での会話をOKとしたことで、付き添いが必要な人も入館しやすくなり、その数は増加している。一例として、視覚障がいのある人が家族と一緒に来館して、本を手に語らう光景も多々みられるようになった、と館長は語る。赤ちゃん連れや高齢者の方、誰もが自分で居場所を選択して過ごせるような多様な仕掛け、配慮が施されている。2022年7月の開館から1年で入館者数は100万人を突破した。施設の話者性から、大型バスでの見学者が多数訪問しているだけでなく、敷地内に約400台の駐車場を確保し、駅から約6kmという立地へのアクセスの利便性を下支えしている。



移転前の県立図書館は、老朽化が進み、閲覧スペースが狭く、書庫が分散して設置されているなど、図書館としての機能が大きく制約されていたこと、さらには駐車スペースに制約があることなどの課題が顕在化していた。このため、2017年3月に策定した新たな石川県長期構想では、本県の中核図書館として機能の充実を図るため、十分な敷地面積が見込め、県内全域からのアクセスも良好な金沢大学工学部跡地に移転・建替することとなった。



外観*



サイン計画



だんだん広場



閲覧席

所在地 石川県金沢市小立野2丁目43番1号
 運営 石川県
 開館 2022年7月
 *2023年7月時点で
 入館者数100万人突破
 開館時間 閲覧エリア 9:00-19:00
 文化交流エリア 9:00-21:00
 *土・日・祝はいずれも18:00まで
 設計者 (株)環境デザイン研究所
 敷地面積 32,378m²
 延床面積 22,720m²
 階数 地下1階地上4階
 蔵書数 約110万冊(2023年3月末日時点)
 貸出冊数 459,186冊(開館〜2023年3月末)
 駐車台数 400台
 公式サイト <https://www.library.pref.ishikawa.lg.jp/>

*写真提供: 石川県立図書館



田村俊作 館長の一言

基本構想の段階から、従来の図書館の概念から枠組みを少し広げた図書館にしたいと考えてきました。館内は、大声でなければ会話してもOK、文化交流エリアは飲食もOKです。ルールを緩和したことで、今までになかった新しい楽しみ方が多く生まれてきている様子が見られます。誰でもここに来て、誰でも交流できる、本を基点とした知的な刺激がある、開かれた広場のような存在を目指していきたいと思えます。

軽井沢風越学園

いつでもどこでも本と出会える学校

参考事例: 学校図書館



円形の図書館を中心として、放射状に教室が並び

軽井沢風越学園は幼稚園・小学校・中学校の混在校で、3歳~15歳の子どもたちが一緒に学んでいる。豊かな森の中に建つ2階建て校舎は、その全体がライブラリだ。スロープで展開される本棚の他、随所にソファや椅子、隠れ家のような穴なども配され、校舎のどこにいても本と出会うことができる。風越学園の子どもたちは、遊びの中から生まれる「こんなことしてみたいな」「これはなんだろう」という気付きや疑問を大事にすくいとりにながら、探究の学びへとつなげていく。その学びの過程で大きな拠り所の一つになるのが、本。本は、問いを深めたり、次の「やってみよう」の足かりになる。司書は、たとえば理科室の近くに関連する本を配し、子どもたちの学びや活動に近い本との出会いをつくっている。本を介した遊びと学びのサイクルに、風越学園のライブラリーは寄り添っている。



ソファや階段、カーペットの上あらゆる場所が閲覧席

所在地 長野県北佐久郡軽井沢町
 設計者 (株)環境デザイン研究所
 開館 2020年
 公式サイト <https://kazakoshi.ed.jp/>

国際教養大学中嶋記念図書館

キャンパスの中心に創られた、知と出会う場所

参考事例: 大学図書館



半円形のブックコロシアム 約8万5千冊の蔵書の6割が洋書

国際教養大学はすべて英語の少人数教育が徹底され、入学して1年間は全寮制となっている。中嶋記念図書館は24時間365日開かれ、試験前は、深夜まで勉学に励む学生の姿が多くみられ、学生の自律的な学びを支える拠点になっている。半円形で段状に構成された「ブックコロシアム」はスロープと階段でつながれ、洋書を中心に配架された書架の背面には閲覧席が設けられている。これを覆う大きな傘状の木の空間は天井高さ12m、半径約22mで、「グレートホール」と呼ばれ、本との出会い、探索するワクワク感を盛り上げてくれる迫力ある風景が展開している。段状の空間の下にも閲覧室がとられ、学生は思い思いの場所で勉強や読書に励むことができる。秋田県産の杉が多用されているこの建築は、日本一美しい図書館ともいわれおり、秋田の魅力発信に役買っている。



電子ジャーナルは約9500タイトルを揃え、最先端の研究を把握できる

所在地 秋田県秋田市
 設計者 (株)環境デザイン研究所
 開館 2008年
 公式サイト <https://web.aiu.ac.jp/library/outline/>

海士町 島まるごと図書館

港も飲食店も診療所も、島民とともに育てる図書館

コレクション

さまざまな暮らしの場面に、本がある

海士町の「島まるごと図書館」では、飲食店、公民館、診療所や個人宅まで、様々な生活の場が図書館の「分館」になっている。たとえば「後鳥羽院資料館」では地域の歴史や観光、文学の本、福祉施設では入居者が長く楽しめるシリーズものなど、それぞれの特色や利用者層、運営方法に適した選書の工夫がされている。

サービス

島の課題、島の未来を一緒に考える場所

本だけでなく、図書館のもつ情報や場を積極的に活用し、利用者の声を形にしてきた。中央図書館の一角にある「シードライブラリー」は、島に移住し農業を営む利用者からの相談をきっかけに生まれた。離島にとって切実な、島固有の種の保存という課題に対し、図書館は「種をシェアしてつなぐ」ライブラリーをすぐに実施。ここから交流会など関心をもつ人同士のつながりにも発展し、農業関連本の貸出も増えた。

コミュニティ

島の人々の「やってみたい」を後押しする図書館

島内に点在する分館のほとんどは分館側からの要望で開設され、現在24か所まで増えた。学習塾では高校生が提案した本の交流企画、ホテルでは従業員が組んだ短歌特集など、図書館員と島の住民がつくる本棚は活き活きとしている。今年開館した分館「ベイベイみなみ文庫」は個人宅を一部開放した「住み開き」の文庫。「地域の子どもの集まる場所にしたい」また「自分の子どもに色々な経験をさせたい」という思いもあって「チャレンジし、中央図書館や近隣の小学校図書館のサポートを得て運営中。図書館をきっかけに、地域に新しい交流の場が生まれている。

空間

スーパーもコンビニもない島に、図書館があることの意味

日当たりのよい中央図書館の閲覧席には、セルフサービスの飲み物も持ち込める。カフェのない島で、ほっとできる空間は、島民の1割以上を占める1ターンの移住者にも人気だ。「移住を考えていた時、中央図書館に来て『これなら住める』と思った」「ここには『居ていい』と思える。子育て中は特にありがたかった」と利用者は語る。住民の多くが顔見知りという環境で、図書館は落ち着ける居場所にもなっている。

アクセシビリティ

あらゆる世代が本を手にとるために

多様な分館と島内の保育園・小中高の図書館は、あらゆる世代の手に届きやすい場所へ読書機会を提供し、島民一人当たり年間貸出数7.1冊*2と利用率は高い。また島民の約4割は65歳以上で、図書館へ足を運べない高齢者には、行政の健康相談とあわせた移動図書館や配達等で本を届ける。こうした島全体へのサービス、多岐に渡る運営は、図書館員の人の手による、日々の細やかなメンテナンスが支えている。

*1 1(アイ)ターン…出身地以外の場所への移住

*2 2022年度年間貸出数16,629冊/島人口2,316人の数値。県内の町立図書館平均は4.7冊。



磯谷奈緒子 館長の一言

たくさん分館の運営など、なぜ図書館がそんなことまでしているの？と言われたら、すべては島のためーこの島がもっと良くなり、人がより良く暮らせるためと思ったら、自然なことなのではないかと思えます。利用者の皆さんからの「こんなことがしたい」というさまざまな提案は、今までほとんど断ったことがないですね(笑)。



海士町中央図書館*
目の前に田んぼが広がる閲覧席。
セルフカフェの飲み物と一緒にくつろぐこともできる。



海士町中央図書 和室*
定期開催の「まち・暮らしミーティング」で環境・教育・食などについて思いを話し合う。住民自身が地域のこれからの考える拠点として図書館が活用されている。

所在地 島根県隠岐郡海士町大字海士1490番
運営 島根県海士町教育委員会
開館 構想策定2007年 中央図書館開館2010年
開館時間 中央図書館:10時~18時 火曜休館
設計者 中央図書館:IMU建築設計事務所
延床面積 中央図書館:272 m²
階数 中央図書館:木造1階建
蔵書数 40,905冊(2022年度時点)
貸出件数 16,629冊(2022年度年間)
公式サイト <http://lib.town.ama.shimane.jp/index.php>



後鳥羽院資料館
(歴史資料館)



ベイベイみなみ文庫(個人宅住み開き)*



島根県隠岐郡海士町は日本海に浮かぶ人口2,300人ほどの島。町の存続危機を経て2007年に人づくり推進のため「読書活動」をキーに「島まるごと図書館」構想を策定。島内の保育園、小中高を中心に地区公民館や港、診療所など人が集まる既存の施設を「分館」と位置づけて整備し、それらをネットワーク化することで、島全体を一つの「図書館」としている。

*写真提供:海士町中央図書館

本のある風景 ② 世界の図書館

「図書館」という言葉のイメージをはるかに超える活動領域や、魅力ある空間を有する図書館が世界には数多くあります。公共図書館に限らず、人と地域、未来のために活動するいくつかの例を紹介します。

アレクサンドリア図書館

学術図書館の源流から、未来の世紀へ向けて



コレクション

現代に蘇る 情報と学術、文化の拠点

● 古代アレクサンドリア図書館

紀元前300年頃、世界の書物を集め、研究者が集う学問の中心地であった古代アレクサンドリア図書館。その精神を再現するためユネスコとエジプト政府により設立された。

● パピルスから電子情報へ

『エジプト誌』デジタルコレクションや電子図書館システムDARなど、電子情報の基盤整備も主導。これらに自宅からもアクセスできるほか、館内では無料WiFiを通じ館の契約する外部データベースにもアクセスできる。

● 知識の生産と普及のための拠点

12の研究センターを抱える研究機関であり、また国内の大学から図書館の電子資料にアクセスできるプログラムなどを通じ、国内の研究活動の活性化も図っている。

コミュニティ

世界を見る窓・エジプトを見る窓 多様なアウトリーチ

● 人々と文化の、対話と理解の場

館内に4つの博物館や、美術品を収集するアートセンター、展覧会場、イベント会場やプラネタリウムなども備わり、本のみならず多角的な文化と情報の収集・発信拠点となる。

● 文化と出会う

ガラス張りの屋根から柔らかな光が入る閲覧室の中には、アラビア書道などの展示や現代アート作品が置かれ、利用者が様々な文化と交わる機会を生む仕掛けとなっている。

● 充実のアウトリーチ

国際音楽祭やブックフェアなどの文化イベント、研究センターやドキュメンテーションセンターの出版事業、電子情報基盤の構築、学術シンポジウムの開催など、国立館ならではの規模で充実したアウトリーチ活動が行われている。

所在地	エジプト アレクサンドリア市	延床面積	約85,000m ²	主閲覧室のみ	約20,000m ²
運営	エジプト・アラブ共和国	階数	11階建て(うち地下4階)		
開館	2002年	蔵書数	登録図書約100万点	全ての資料	約260万点(2022時点)
設計者	Snøhetta	入場者数	年間約150万人		
		公式サイト	https://www.bibalex.org/en/Default		

* 入館は有料、主閲覧室への入場は16歳以上(ガイドツアー除く)
* 6~11才向けの子どもの図書館、12~16才向けの青少年図書館も設置

取材協力・撮影:
坂東和美(リサーチャー)

ニューヨーク公共図書館

どこまでも人のために
公共図書館の可能性を広げ続ける



写真提供:
The New York Public Library

サービス

あらゆる人の探求を支える、開かれたアーカイブ

● 民間が運営する公共図書館

4つの研究図書館と88の地域分館からなる、世界最大級の公共図書館。N.Y.の5つの行政区のうち3地区を管轄し、NPO(非営利民間団体)が寄付をもとに経営する。

● 大都市の中で

図書館には年間1,600万の人が訪れる。N.Y.において、だれもが無料で利用でき、WiFiやPCが使って情報へアクセスできる拠点であり、安全に過ごせる貴重な場所。

● 情報は人のために

コロナ禍中、図書館は市民の情報拠点としてオンラインページ「Community Support Resources」を立ち上げた。医療や食糧、住居や仕事等に関わる信頼できる情報をまとめ、閉館中も情報提供を通じ緊急時の生活を支えた。

アクセシビリティ

何を残し、何を伝えるか 多様化するメディアに応じる

● 多様なニーズに応えるプログラム

年間55,000件を超える図書館プログラムでは、非英語ネイティブのための英語講座をはじめ、履歴書作成からサポートする就職支援など、人種や世代など多様な背景をもつ人々が必要とする情報やスキル、機会を提供している。

● どこからでもアクセスできる

コロナ禍の閉館時に公開された書籍アプリSimplyEやオンラインプログラムの他、「人知 Google」とも称されるレファレンスサービスも電話やメール、チャットで利用できる。

● 地域のセンターとして

88か所の地域分館では、移民や低所得など地区毎に面する様々な状況に応じつつ、子どもから高齢者までが頼ることのできる近所の「顔見知り」として図書館員の存在がある。

所在地	アメリカ ニューヨーク州ニューヨーク市	蔵書数	研究資料4,650万点
運営	NPO(非営利民間団体)		貸出資料870万点(2019年時点)
開館	創設1895年 開館1911年	貸出件数	年間238万(2019年時点)
設計者	(本館) Carrère and Hastings	入場者数	年間1,600万人
階数	(本館) 3階建て	公式サイト	https://www.nypl.org/

interview



エイミー・ゲダルディグ
ニューヨーク公共図書館
広報課課長補佐

Amy Geduldig
New York Public Library
Department Coordinator
Communications & Marketing

ニューヨーク公共図書館に
12年間勤める

◆ ニューヨーク公共図書館の特徴とは…

本館は本を借りることはできませんが、本館の斜め向かいにある別館や、ニューヨーク市88ヶ所にある地域分館で借りられます。優れたリサーチ機能と、傑出したアーカイブ、短期と長期の研究者プログラムが大きな特徴です。開館以来、資料を一般公開してほしいと願う人々によって、コレクションは増加し続けています。これらのアーカイブはニューヨーク、全米のものに限らず、世界中の文学、写真、歴史的資料など多岐にわたっています。多様な国の人が住む大都市ニューヨークならではのといえるでしょう。

◆ 図書館の機能として重要なことは

美術品や歴史的資料など多くのアーカイブを所蔵していますが、展示を見るだけの美術館とは違い、ここは研究に利用してもらうことが目的です。ライブラリーカードがあれば、誰でもアーカイブを利用して研究できます。デジタル化された資料も多いです。

◆ 公共図書館の役割の広がり

公共図書館という組織の中のネットワークだけでなく、プリンストンやハーバードといった大学や研究組織とパートナーシップという形で連携しデジタル化を協力体制の中で進めています。

◆ すべての人に開かれた施設として

歴史的建造物なので観光客が多く訪れます。利用者や観光のエリアを分けて、利用の妨げにならないようにしています。観光客は2階のリーディングルームの入口まで、中に入ることはできません。観光客を100パーセント「ウェルカム」しています。「トレジャーズ(宝物)」と呼ばれる1階の常設展のギャラリーや、特別展示は無料で、館内の多くの場所を見学できます。

◆ これからのビジョン

ニューヨーク公共図書館は、分館も入れて2,000人近くの雇用者がある大きな組織です。その豊富な情報とパワーを活用して、もっと学びたいと思われるような活動をし、子どもから老人までの方々が、知りたいと思った時に、すぐに役立つような場所として、100年以上そのような需要に応じてきました。今後も、ここで世界の様々なことを学べるように、プログラムや資料を用意することが大切だと考えています。

ヘルシンキ中央図書館 Oodi

市民とともに歩む 都市の真ん中にある公共図書館



所在地 フィンランド ヘルシンキ市
運営 ヘルシンキ市
開館 2018年12月5日 *フィンランド建国100年事業(独立記念日12/6)
設計者 ALA ARCHITECTS
延床面積 17,250m²
階数 3階建て
蔵書数 約10万点
入場者数 8000人程度/日
公式サイト <https://oodihelsinki.fi/en/>
愛称のOodiは公募によって選ばれたもので、神や君主をたたえる「頌歌」を意味する
撮影:Kuvio

過ごし方は自由 多彩な機能をもった市民のリビングルーム

- **立地の良さ**
街と市民の中心にあり、正面の大きなガラスは外側と内側に壁のない空間を創造している。「フィンランドに存在するすべての人々に対し開かれている」というメッセージをもつ。
- **アクセシビリティ**
アクセシビリティの良さは物理的なことに留まらず、誰にでも開かれているという、差別を行わない等の利用者の心理的安全性を確保している。
- **公共図書館の可能性**
フィンランドの平等と高福祉国家としての政策を推進し、高い水準のサービスを届けてきたことを図書館機能として具現化。市民への大規模な聞き取り調査やHelMetネットワークが蓄積してきた利用データが活用された。

街とつながる/つくる/思考する 空間の3つのレイヤー

- **エントランスホールと多目的スペース**
フロア全体の見通しが確保され、歩いていると各所の様々な活動が目に入り、小さな街のような空間体験が味わえる。
- **創造的な空間と「クーティオ」**
撮影スタジオ、3Dプリンターがある工房やゲーム、ワークショップなど、創造的に使える機能が集まっている。クーティオと呼ばれるメディア機能を伴った空間では大学と連携した公開講座なども行われる。
- **議事堂を臨むブックヘブン**
「book heaven(本と共にある天界)」と呼ばれる3階は、波打つ天井や自然光が心地よく、斜面に配置された段床に腰をかけることもでき、公園のような感覚で読書ができる。

空間

interview



ウッラ・レイニッカ
ヘルシンキ中央図書館
コンテンツサービス部長
Ulla Leinikka
Helsinki Central Library
Head of Content services

2018年のオープン以来
24人の職員と共に、
家族向けのサービスを
担当している。

◆ 魅力ある建築空間と建築家の連携

このような建物に毎日働きに来れることは本当に素晴らしいことです。公開コンペでALA ARCHITECTSの設計が市民に選ばれました。選ばれた理由のひとつは、機能が、3つのフロアに完全に分かれていることです。そのことによってフロア毎に異なるサービスを提供することが可能になっています。ALA ARCHITECTSは、提供するサービスの企画や、配置計画においても不可欠な役割を果たし、計画変更のたびに私たちは建築家と協力しながら課題を解決しています。

◆ 市民の財産

現在一日の来館者は8,000人を超え、誰でも無料でサービスを使うことが出来ます。市民が図書館が共通の財産であることを理解し、その価値を認めているためだと思います。

◆ 誰にも提供される様々な空間

私たちは、来館者に対して「ここに何をしに来られましたか？」と来館者に聞くことはしません。誰でもここに入って来て、この空間を使うことが出来ます。

◆ 社会における役割

確実にこのような場所があることの重要性が高まっています。誰でも



アンティ・ノウスヨキ
建築家
ALA ARCHITECTS
Anti Nousjoki
Architect
ALA ARCHITECTS

2013年のヘルシンキ中央図書館
のデザインコンペで優勝、
建物の設計の委託を受ける。

◆ Oodiの設計概念

デザインのコンセプトは図書館機能を3つのレベルに整理したということに尽きます。私たちは、従来のアーカイブ型の図書館にはしたくなかったのです。利用する人が利用したいように使う可能性を創出する都市空間となるよう、3つの異なる景観を作り上げました。

◆ 図書館司書との連携

我々は多くの専門知識と経験を持つ、司書が作成した要綱書に基づいて仕事をしました。その要綱書は非常によくできており、司書のみなさんは、建物がどうあるべきかではなく、そこから生まれるもの、人々がそこで何をしたいかについて、よく知っており、高い質のデータが提供されました。コンペ後は、司書の方々と、図書館の各要素について検討をすることで案をさらに改善し、全体設計へと展開することが出来ました。建築家以上にこの建物の機能性について知っているのは司書の方々ですから、常に彼らには関わっていただいています。我々はそれらの機能を実現する技術組織(イネーブラー)というのが適切でしょう。

◆ 図書館の公共性

図書館は、コンサートホールとは違い、いつでも来館することができます。誰もが歓迎され、誰もがここに来て、この建物、施設を自分の好きなように使うことができます。多くの人は自分のパソコンを持ちこんで、

無料で情報を得られる場所でもあります。3階のバルコニーは、向かいにあるフィンランド議事堂の最上階と同じ高さです。フィンランドにおける民主主義と公共図書館の象徴的なつながりが強く見えるのです。

◆ これから取り組んで行きたいこと

今後も人々が来る場所であり続けることを願っています。私たちは誰をも差別しません。デジタルガイダンスの重要性も増えています。ですから、誰もがここにきて情報を得るため、今以上に高齢者も含めたデジタルガイダンスサービスが提供できれば良いと思います。

◆ 本当に大切にしたい役割を市民とともに創りあげる

本当に重要な側面はアクセシビリティです。全てのサービスが可視的であるという物理的なアクセシビリティも重要ですが、誰もが歓迎され、ここに来てサービスを利用できると感じる事ができる精神的なアクセシビリティも重要です。そして、ここを安全な空間にするための原則をワークショップで利用者と一緒に作り上げました。この秋に、利用者と一緒その原則を更新することになっています。原則の主要な部分の一例は、差別をしないこと、すなわち他の人を尊重することです。また図書館の職員が常に利用者のために控えており、できる限りお手伝いすることを約束しています。

仕事や勉強をしたり、娯楽を楽しんだりします。都会に住むことの利点は、他の人に触れることができる点にあります。これがこの建物の核となる要素かもしれません。これは機能性が中心である公共の建物との違いかもしれません。

◆ 建築の試み

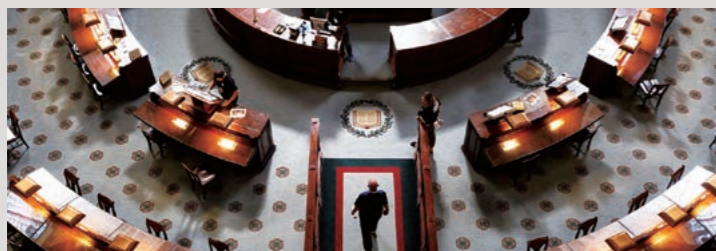
オープン後、長年我々が考え、話し合ってきたシーンをあちこちで見つけたことは大きな驚きでした。冒険的なこの建物は、決して堅苦しくなく、厳格でもなく、このように楽しい、様々な様式や可能性が共存していました。意図そのものは、おかしなものにすることではなく、楽しく陽気で、同時に堅実なものを目指していました。そこには真に良い書物があり、真義を扱っているというトーンもあり、ある意味、極めて真剣で高い機能を持つ建物を作る中にも楽しいトーンを持たせるといった建築の試みでもありました。

◆ 公共図書館としての役割

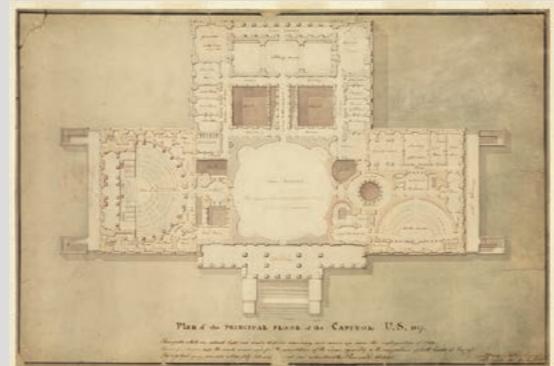
Oodiはもちろんフィンランド社会が市民を信頼していることを示しており、また市民はそのように信頼されると素晴らしい行動で反応することを示しています。この建物はフィンランド社会で起きていることを3次元的に表現していると思います。それはフィンランド議会が広場を挟んで反対側にあることによっても象徴されています。他の多くの都市や国もここから学ぶことは多いでしょう。

米国議会図書館

次の世代へ知をつなぐ 米国の議会図書館



所在地 米国 ワシントンD.C.
運営 米国議会
開館 1800年創設、1897年トーマス・ジェファーソン館開館
その後4館増設、現在総計5館で運営を賄う。
資料総計 約1億7,500万点(2022年時点)
入場者数 37万人/年(ジェファーソンビルへの来館者数/
2022年度、閲覧室利用者を除く)
公式サイト <https://www.loc.gov/>



米国議会議事堂、英米戦争後再建図面、米国議会図書館を含む Benjamin Henry Latrobe, United State Capitol, Washington, D.C. Principle floor plan, vestibule, library, & senate chamber, House of Representative, 1817. Library of Congress, LC-DIG-ppmsca-17594.

interview



エイプリル・スライトン

米国議会図書館
広報担当上級アドバイザー

April Slayton

Library of Congress
Senior Advisor for
Communications and
External Relations

◆米国議会図書館の素晴らしさ

初めて図書館を訪れる方は、この素晴らしい建築を目にし、ドアをくぐり、さまざまな所蔵品を発見し心躍らせます。それを来館する皆さんと共有することは本当に楽しく私を幸せにしてくれます。図書館のサービスには、オンラインで見ることができるデジタルコレクションもあります。ワシントンD.C.に来ることができない人も図書館の資料を研究したり、学ぶ機会が数多く提供されており、図書館の建物を越えて、あらゆる方々とそれを共有できることは本当に素晴らしいことです。

◆議会図書館と他の公共図書館との違い

議会図書館は国立図書館です。蔵書は集めていますが、一般には貸し出しはしません。議会図書館の場合には、利用者は書籍や雑誌、原稿や写真など、所蔵するものを見るためにここにやってきます。私達は後世のために長期間にわたり所蔵物を保護し、保存していますので、所蔵物は常にここにあり、利用者は望むときに、将来も含めて希望するときにここで見るのです。

◆議会図書館のはじまり

1800年代、最初の議会図書館は議事堂の地下にありましたが、1812年の戦争で消失してしまい、何も残っていません。その直後トーマス・ジェファーソンが自分の所蔵するものを米国政府に売却し、それで国立図書館を再建することができました。

◆米国議会図書館の役割と特徴

議会図書館の使命のひとつは、米国の歴史を記録し、後世に伝承すること。私はそれを、図面や写真に代表される建築資料の収集・保存・公開を通して行っています。議会図書館は米国議会議員のみならず、全世界の人々に門戸を開く、大公共図書館です。

◆日本の図書館、資料館との違い

資料を公開し続けられれば傷んでいきます。保存と公開のバランスをいかに保つかは大きな課題です。日本は保存優先型で、それが資料公開の壁になっているようですが、米国議会図書館では、何のために、そして誰のために資料を収集するのを考えて、保存専門スタッフと協力しながら、公開にも大きな力を入れています。

◆デジタルコンテンツの可能性

議会図書館は永久保存・公開を目指すので、館内の技術対応が確認されるまでは、ポーンデジタル資料の収集、特に様々なアプリで作成されている建築図面の収集は保留。一方で、既存資料のデジタル化・公開には積極的に取り組んでいて、数多くの資料がインターネットを通して世界中から検索できるようになりました。

書籍だけでなく、議会が仕事をする上で役に立つあらゆるものを購入し、持ち込むという風土は、そこから始まりました。トーマス・ジェファーソンはこの国の法律を作る上で米国議会がアクセスしなくてもよいテーマはないと信じていました。その為、極めて広範で多様な資料がここに取められています。

◆専門性の高いスタッフの活躍

ここには多くの幅広い分野の専門家て情報を探すスタッフがあり、この図書館の司書は利用者が求めている本のみならず、その他の関連するテーマや情報を探す手助けをする最高の人たちです。彼らの多くは専門の知識を持ち、この世界最大の図書館で働いているということに誇りを持っています。

◆1億8,000万件を超える蔵書や収蔵品の保管と管理

議会図書館全体には数多くの書棚がありますが、メリーランド州にも大きな保管施設を持っており、必要な時に全ての資料を探し出すことができます。拡大を続ける収蔵物を保管するには極めて大きな保管施設が必要です。私たちは常に、アクセスしやすいようにより多くのものを一堂に保管できるようにしています。毎日何千もの書籍を受け取っており、写真や原稿その他のものが図書館に寄付されたり、さまざまな方法で取得されたりしています。ここは本当に驚異の組織でスタッフは常に新しいものに対応しなければなりません。

◆他施設とのネットワーク

世界建築・博物館連盟には世界中の建築資料館が参加し、ネットワークを構築しています。私はそのネットワークを利用し、主に米国の資料館における原資料やデジタル資料に関する情報を収集。そして資料を多くの研究者に活用してもらうよう、収集した情報を建築歴史家協会と連携して、さまざまな方法で公開することに努めています。他施設が所蔵する資料を認知することによって、資料館同士が連携・協同して研究者や利用者の対応にあたる事が可能になります。

◆米国議会図書館資料収集の特徴

一貫性: 議会図書館の詳細な収集指針に基づいて資料収集を行っています。私の担当分野では、建築・工学・意匠に関する歴史をどのような図面や写真などのビジュアル資料を介して伝承できるかを考え、既存資料との関連も鑑みて収集しています。
柔軟性: 研究者や利用者の需要、並びに社会の動向や国際関係にも敏感に対応し、人々が将来議会図書館の資料を介して、過去を正しく理解すべく、資料収集指針の定期的な改正も行っています。

さまざまな探求を支持する、全世界の人のための図書館

●世界最大規模のコレクション

現総計資料点数約1億8千万点。書籍や雑誌に限らず建築図面、写真、地図、映画、原稿、楽譜など幅広い媒体の資料を収集し、扱う言語も460以上にわたる。日本関連資料も多々含まれている。

●歴史が語る空間の魅力

1800年に議事堂の中に開設。蔵書の拡張により、1897年に議事堂の対面に新たな建物(現ジェファーソンビル)が建設される。見事な装飾をもつエントランスのグレートホールや円形のメインリーディングルームは、観光客の見学もあとを立たない。

●みんなの図書館:全世界への情報発信

全米各地からの訪問に加え、16歳以上で図書館カードを作成すれば、世界中の誰でも閲覧室を利用可能。視聴覚障害者センターも存在。また1960年代には世界に先駆けて目録の電算化を開始。90年代以降は既存資料のデジタル化やデータベース化を促進し、遠隔地への情報発信にも力を入れている。



理想の図書館

鹿島 茂
作家/フランス文学者

すでに書いたことだが、私の生家には本と呼べるような本は一冊もなかった。第一、家には本棚がなかったのである。こんな環境だから、私が読書好きになるはずもなく、子供時代に読んだものといえば『少年画報』などの少年漫画か、母親が購読していた『主婦の友』、叔父が購読していた『航空情報』くらいだった。

そんな私が「本に憑かれた人生」を送るようになったきっかけは、中学三年の夏休みに読書感想文の宿題のため、隣町の商店街にあった新刊書店まで相談に出掛けたことだった。書店主は私の話を聞くと、それなら、いま筑摩書房から『現代文学大系』が刊行を始めたところだから予約購読すればいい、夏目漱石でも芥川龍之介でも、全部入っているから読書感想文を書くのに最適だと言い、予約購読申し込み書を渡してくれたのである。私ที่บ้านに持って帰ると、両親は国語の勉強にでもなるのかと誤解したのか購読をOKしてくれた。

かくて、私は毎月一冊配本される『現代文学大系』を雑誌でも読むように読んでいった。その結果、高校一年の半ばにはもう一端の文学少年になっていた。しかし、家には『世界文学全集』まで購読できるような金はなかったので、こちらは高校の図書館で借りて読むことにした。通っていた神奈川県立湘南高校にはかなり立派な開架式の図書館があり、何種類かの世界文学全集が揃っていたからだ。

ただ、困ったのは『現代文学大系』と違って配本順に読むということができないことだった。そこで『世界文学全集』の第一巻から順番に読むことにした。一つの『世界文学全集』を読み終えると、次もまた第一巻から読み始めた。こうして河出書房、新潮社、中央公論社、三笠書房の文学全集を重複本を除いてほぼ「完読」したのである。

ところで、こうして図書館に親しむようになって発見したのは、周りをすべて本で囲まれた空間というのはなんと心落ち着くのだろうかということである。一冊も本のない環境に育った身としては図書館ほど気持ちをリラックスさせてくれる環境はなかった。いずれ自分で本を買えるようになったら本の壁で周りを囲んだ書齋を持てたらと思った。この願いはその後、実現したが、しかし、最初に高校の図書館で体験したような、あの宝の山に踏み入った興奮は味わうことはできない。なぜなら書齋の本は全部自分が買ったものなので、偶然の出会いというものはないからである。人生を決定するような遭遇がある場所、それが理想の図書館なのである。

The Ideal Library

Shigeru Kashima
Author/French literature scholar

As I have written previously, there was nothing in my family home that could be called a book. For one thing, there were no bookshelves in the house. In such an environment, there was no way I could develop a love of reading, and the only things I read as a child were boys' manga such as Shonen Gaho and my mother's Shufu no Tomo women's magazines and my uncle's Koku Joho aviation magazines.

What triggered my lifelong obsession with books was a trip to a bookstore in a neighboring shopping district for advice on a book report homework assignment during the summer vacation of my third year of junior high school. The bookstore owner suggested that I subscribe to the Modern Literature Compendium, which had just been launched by Chikuma Shobo, noting that since it contained everything from Natsume Soseki to Akutagawa Ryunosuke, it would be perfect for writing a book report. I took the subscription form home and my parents gave their OK, perhaps because they mistakenly thought it would help me with my Japanese language studies.

Thus, I came to read the Modern Literature Compendium volume that was delivered every month as if I were reading a magazine. As a result, by the middle of my first year of high school, I was already a young bibliophile. However, since my family could not afford an additional subscription to the Complete Works of World Literature, I decided to borrow these books from the high school library. The school I was attending, Kanagawa Prefectural Shonan High School, had an excellent open-shelf library with several world literature collections.

The only problem was that, unlike the Modern Literature Compendium, it was not possible to read the books in the order they were distributed. Therefore, I decided to read the Complete Works of World Literature in order from the first volume. Then, when I finished reading one world literature collection, I would move on to the first volume of the next collection. This is how I came to read nearly all the "complete works of literature" collections – excluding overlapping works – of Kawade Shobo, Shinchosha, Chuokoron-sha, and Mikasa Shobo.

Incidentally, one thing I discovered as I became familiar with libraries is how relaxing it is to be surrounded entirely by books. As someone who grew up in an environment without a single book, there was no environment that made me feel more relaxed than a library. I hoped that someday, when I could afford to buy books myself, I would have a study surrounded by walls of books. This wish has since come true, but I still cannot experience anything like the excitement I felt when I first stepped into the treasure trove of books in my high school library. This is because all the books in my study were purchased by me, leaving no room for chance encounters. This, to me, is the ideal library: a place that offers the possibility of life-defining encounters.

百冊百景

一般公募の100人の本との出会いの
エピソードを集めた本棚。
「かたち」「まわり」「くらし」「まなび」「なかま」
「あした」「きのう」の7つのカテゴリーに並ぶ。



2019年ライブツィヒ書籍見本市会場



ライブツィヒ書籍見本市会期中に開催された朗読会
写真提供:Axel Schmidt

本のある風景

公共図書館のこれから

2023年9月22日(金)–11月9日(木)

主催 公益財団法人 竹中育英会
企画/共催 公益財団法人 ギャラリーエークウッド
岡部三知代 / 徳平京 / 深澤悠里亜 / 風當嘉津美
石井康友 / 真鍋頼子 / 北原英雄
白川裕信

協力 石川県立図書館、環境デザイン研究所、日本図書館協会
武蔵野市立ひと・まち・情報 創造館 武蔵野プレイス、海士町中央図書館
ヘルシンキ中央図書館、ALA ARCHITECTS
ニューヨーク公共図書館、米国議会図書館
西ノ島町コミュニティ図書館 いかあ屋、軽井沢風越学園
国際教養大学 中嶋記念図書館、日野市立図書館、株式会社長谷木

デザイン 秋山和生 (kabastudio/east)
広報物デザイン 岡島飛鳥
映像制作 森内康博(らくだスタジオ)
会場写真 光齋昇馬

翻訳 Ted Richards

重松加代子

編集/発行 公益財団法人ギャラリー エー クワッド

アドバイザー 酒井忠康(世田谷美術館館長)
木下直之(静岡県立美術館館長・神奈川大学特任教授)
和氣雅子(株式会社AWP代表)

関連イベント

トークショー「本と重ねる時間 鬼頭様の図書館建築をみつめなおす」

日時 2023年10月17日(火)18:30～20:00

講師 松隈 洋(神奈川大学教授 / 京都工芸繊維大学名誉教授)
島田 潤一郎(夏葉社代表)

トークショー「公共図書館のこれからを考える」

日時 2023年10月23日(月)18:00～19:30

講師 仙田 満(建築家 / 環境デザイン研究所会長)
植松 貞夫(日本図書館協会理事)

ブックトーク「木から学ぶ」

講師 森田 真生(独立研究者)

場所 長谷木記念幹

ブックトーク「理想の本棚」

講師 鹿島 茂(作家 / フランス文学者)

場所 ギャラリー エー クワッド

ブックトーク「本:言葉とデザインから成り立つ『どこでもドア』」

講師 高木 穂子(タイポグラフィ / 著者・ブックデザイナー / 同志社女子大学教授)

場所 ギャラリー エー クワッド

ブックトーク「ケアの時代 — 文学に刻まれた風景から」

講師 小川 公代(英文学者 / 上智大学教授)

場所 ギャラリー エー クワッド

©2023 GALLERY A⁴

本書の一部または全部を複製、転載することを禁じます。



THIS IS
MECENAT
2023



ギャラリーエークウッド
公式ホームページ
<https://www.a-quad.jp/>

公益財団法人ギャラリー エー クワッド

136-0075 東京都江東区新砂1-1-1

竹中工務店東京本店1F

Tel 03-6660-6011

Fax 03-6660-6097

GALLERY A⁴

1-1-1 Shinsuna Koto-ku

Tokyo 136-0075, Japan

Tel +81-3-6660-6011

Fax +81-3-6660-6097

<https://www.a-quad.jp/>

